

て弱そうだからな。

「仕方ありませんね……」

ため息をつくセイバーだった。

……何はともあれ、一週間の皿洗いは神代に決定したな……と俺は思った。

5話 竹刀って意外と高いのにすぐ折れる

side 花凜

目の前にセイバー（アーサー王）が現れた。

↓ 戦って死ぬ

↓ 降参して恥をかく

……どっちも嫌だ！！！！

ってかさ、なんかノリで試合申し込んだけど、これムリだろ！！

藤ねえみたいに反則技使ったって勝ち目ないっての！！

だって…目の前で竹刀を構えている可憐な少女…は何を隠そうアーサー王だよ！？英雄中の英雄だよ！！

……無理だ…勝てそうにない……でも…負けたくないって思うんだよな…

アタシは深呼吸をして竹刀を構えなおした。

「…遠坂…お前…意地悪いぞ」

「でも、承諾したのは、あの子よ。」

これで私が一週間皿洗いしなくて済むわ!!!」

「…嬢ちゃんはや地が悪いなあ。」

「そう思うかランサー？マスターの意地が悪いのはともかく、相手の力量を見極められない小娘のせいともいえると思うぞ。」

「…外野…うるさいなあ…」
「…つてかさ、あの「赤い悪魔」め…そんな魂胆があったとはな…」

皿洗いは嫌だ。めんどくさい…」
「…つとなつたら…」

「勝ちに行くしかないってか…」

「…言っておきますけど、貴方では私に勝てません。」

んなこと百も承知だつての!!!

「そうか…でもさ…そうならないかもしれないぜ!!!」

床を蹴り一気にセイバーとの距離を縮めた。

「…面みたいに派手な勝ち方は狙わないで…」
「…胴か小手を狙えば…」

スカッ

「えっ？」

……まさか…避けられた？自信あつたんですけど……

「…ま…まだまだ！！！」

スカッスカッスカッ

…イライラするくらい避けられる…何？今のアタシって藤ねえ状態？

「勝負あつたわね…」

ライダーらしき女性のつぶやく声が聞こえた気がした。

アタシにだってわかるさ………これだけ避けられてるってことは、見切られてるってことくらい………でもさ………

「なんか負けたくねえってんだよ！！！」

誰かにつけられている…って気が付いたから即席で作ったチヨーク煙幕を2つ床に投げた。

とたんに、白い煙があたりを覆い隠した。

「ゲホッゲホッ！！これは…煙幕！？」

「違う…これはチヨークよ！！」

「……藤ねえと同じ発想だ………」

外野の声なんて気にするか！！

確かに藤ねえと同じ戦法だが…アタシはあんな派手にいかないさ。

身をかめて足元を…狙う！！

「はぁあっ！！！！」

スパンツ！！！！

あれ？また手ごたえがない！？

「惜しいですね。ですが…あなたの負けですよ。」

上空から声が聞こえた。見ると…セイバーは弧を描くように宙を飛んでいた。

…たぶん…攻撃が来る直前にジャンプしたのだろう。

「甘いよ！！」

空中には足場がないから態勢の立て直しは不可能！

アタシは落下地点目がけて走った……が……

スパアアン！！

あれ？なんでアタシが宙を舞ってるんだ…？

「くはぁっ！！」

ドサツと床にたたきつけらる…が…痛みはそこまでなかった。

…おそらく、アタシが振り上げた竹刀とセイバーの竹刀が当たって…
…力負けしたアタシが飛ばされたのだろう。

「つく…まだまだ…」

少しふらついたがアタシは立ち上がって、竹刀の先を無表情なセイバーに向けた。
すると、微かにセイバーの顔つきが変わった。

「…まだまだ？あなたはもう分かっているはずですよ。
私には勝てないと。」

「で…でもお…」

うるうる…と涙目になってしゃがみこむアタシ……

さすがに、やりすぎた…と思ったのか、セイバーが戸惑いながら近づいてくる……

そしてセイバーの手がアタシに触れる刹那……！！

「!？」

「泣くもんか!!アタシが!!」

セイバーの竹刀を奪い手の届かない位置まで放り投げると、右手で自分の竹刀を振り上げ…そして…

パシィ

……やっぱり……真剣白刃取りされました。

「ここまで多少の反則は目をつぶってきましたが…さすがに今のはイラッと来ました。」

う…うわぁ……ものすごいパァ…っという効果音が付きそうな笑顔

……

やばい……不味いかも……

「貴方には騎士道というものを骨の髄までしみこませてあげましよう。」

……怖い……

正直にそう思った……彼女からは”殺気”がにじみ出ていた。

一步後ろに下がろうと思ったけど、後ろは壁……少しずつ近づいてくるセイバーが怖い。

このままだと……殺される……!!

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

……!!!!

アタシは……

「負けたくない……!!!!」

振り下ろされたセイバーの竹刀がやけに遅く見えた。

アタシは何も考えず……ただ「勝ちたい」一心で自分の竹刀で攻めに行った。

バシィィィン……!!

「……え？」

何が起こったのか自分でもよく分からなかった。

ただ…セイバーの表情が一瞬、ポカンとしたかと思うと、即座にアタシから離れるように後方へ跳ね飛んだ。

なんか…表情が別の意味で怖い…あと、周囲の視線が痛い…

「貴様…今の力はなんですか？」

「へっ？今の力って…！！！？」

その時、アタシは気が付いた。…セイバーの持っている竹刀の半分より上がボッキリ折れてなくなっているってことに…

それから…自分の内側から感じる燃え上がる種火のような何かに

……

「あ…あははは…って笑うしかないや…」

力が抜けて座り込んでしまった…。

分かるさ…なんとなくだけど、なにをしたか…何に目覚めたか…こりゃ…死亡フラグが立ったかもな…あははって笑うしかないよ！！

「いいから答えろ！！！」

怖い顔したセイバーが問い詰めてくる。

アタシは自身の額に手を置いて下を向いた。

「……たぶん……こりゃあ第六感……小宇宙^{コスモ}に目覚めたんだな……
あははは……死にたくないのに……」

……本当は魔術の方に目覚めたかったのに、なんで小宇宙^{コスモ}に目覚めたんだよ……！

聖闘士にはなりたくない……魔術師の方が憧れるのに……

アタシはもう、笑うことしかできなかった……。

5話 竹刀って意外と高いのにすぐ折れる（後書き）

星矢「なんでさー!!」

士郎「え…？それって俺の口癖なんだけど……」

星矢「なんでまたF a t e ネタなんだよー!!」

桜「ほんの少し聖闘士星矢の小宇宙という単語が出てきましたけど……」

星矢「納得いかねー!!」

紫龍「諦めろ、星矢。

今の舞台は冬木市だ。必然的に聖闘士星矢のキャラが少なくなるのが分らないか？

……それに、次回からは聖闘士ネタも増えると思うぞ?」

星矢「そ…そうかな!？」

凜（単純ね……）

瞬「…星矢は出てくれるか分らないのに……」

コレの話の中心となる聖闘士は題名通り黄金聖闘士なんだから……」

沙織「では、もう少し星矢の出番を増やすよう……または題名を『Gold』から『BRONZ』に変更するように直談判してきますわ。」

「

一軍青铜一同「沙織さん!?!」

士郎「えっ?…ニユースでは行方不明って……」

沙織「だって…暇なんですもの……出番なくて。」

瞬「…沙織さんらしいや……」

6話 勘違いから大惨事になることってよくある

side 士郎

「ってことで、アタシはもう帰るよ。」

遠い目をして『コスモ』について語ってくれた神代はそういうと、よろよと立ち上がった。

神代が言うには『コスモ』というものは以前テレビでやっていた『ギャラクシアン・ウォーズ銀河戦争』で星矢たちが使っていた技の源…だそうだと、それがなんか目覚めてしまったと……

なんか神代って凄い奴かもしれない……

「えっ…もう帰っちゃうの!？」

貴女とはM & a m p ; Wについて話し合いたかったのに!…!」

イリヤが抗議の声を上げる。

……そういえばこいつ…M & a m p ; W大好きだったけ？

神代はイリヤの頭をポンポンと叩いた。

「ごめんな、なんか疲れたからさあ…。」

それに、なんか嫌な予感するし……また今度な。」

「いやな予感？」

俺が疑問符を浮かべると、神代は困ったような顔をした。

「えっと…その…あれだ。」

アタシの髪って夜道じゃ目立つだろ？だから何かと絡んでくる奴が多いんだ。

もつとも、そいつら全員ブツ倒してきたけど…なんか今日は嫌な予感がすんだよ……。」

……確かに神代の髪は白い…夜道じゃ目立つだろう……

ってこれは同じ白髪を持つイリヤやアーチャーにも言えると思うが、イリヤにはバーサーカーという最凶のサーヴァントが付いているし、アーチャーは男だ。アーチャーを襲う人間なんて想像もつかない。

だが、神代は弱そうに見えるし1人だ。……さっきのコスモっていう力を使えるから怖いものなしにも見えるが……見るからに疲労感が出ているので、使いこなせるかどうか危ういだろう……

「んじゃあ、俺が家まで送っていくよ。」

「なっ！？士郎！？」

遠坂が驚いて声を上げた。

「だってさ…疲れてるみたいだし……」

「まあ…確かに最近は物騒だし…ね。」

藤村先生を襲う人がいるとは考えにくいし、イリヤにはバーサーカ

ー…桜にはライダーが付いてるけど、神代さんは1人だからね……」

「ちょ……アタシは1人で帰れ……」

「士郎や遠坂さんの言う通りよ……!」

藤ねえが神代の肩をつかんだ。

「だって神代さんは疲れている上に、この町のことをよく知らないでしょ!？」

いいから士郎に送ってもらいなさい。」

「……分かりました。」

ため息をはく神代……

「……じゃあ、途中まで頼むよ、衛宮。」

……なんか……そんなに一人で帰りたいのかな?つてくらい嫌そう
な感じの顔を向けられた。

side 紫龍

……『黒炎の姫』…神代 花凜は、1人の少年と一緒に屋敷から出

てきた。

……あの少女は何か変わっている……

あの家の中で、習得には何年も厳しいとしか言い表せない修行を積まないといけない小宇宙コスモに目覚めたのも変わっていると思うが……

それよりも、彼女からは、まだ小さいながらも2種類の小宇宙を感じるので。

1つは荒々しい小宇宙……もう1つはそれとは対極の、すべてを包み込むような小宇宙……

2種類の小宇宙を持つなんて……サガみたいに二重人格なら分かるが、そうでもないみたいだ。
一体彼女は…何者なんだ？

「!？」

公園の辺りに差し掛かった時、突然、殺気を感じた…と思ったら、何か刃物のようなものが俺に襲い掛かってきた。

俺がそれを避けると、攻撃してきた相手は感心したような声を上げた。

「ほう…なかなかやるな…」

「お前はだれだ!？」

「お前がストーカーをしてる少女の守護者…とでも言っておこう。」

青い騎士はそういうと、剣を俺に向けてきた。

……なんでこんな時代錯誤の騎士が街中に！？……っと突っ込みたくなつたが、ツッコむ前に乱入者が現れた。

「コラアアア！！！！オイラが花凛の守護者や！！！！
お前は黙ってればいいんやんけ！！！！開闢！！！！」

物凄い勢いで白銀の巨鳥が割り込んできた。

……物凄い怒りのオーラを感じる……

「ふっ…ホルスよ…頭が悪いのではないか？

お前は守護者ではなく守護鳥なのではないか？」

「ええんやんけ！！守護者でも守護鳥でも主人を護る一番の相方は
オイラや！！！！

『ブラックメガフレイム』！！！！！！」

そついうと鳥は俺に向かって黒炎を放ってきた。

「廬山百龍覇！！！！！！」

黒い炎を、俺の放った無数の龍をかたどった闘気で相殺させた。

ズトオオン！！！！

物凄い爆音があたりに響き渡る。軽く青い騎士が舌打ちをしていた。

「…不味いぞ…このままだと人が集まってくる……
やりすぎだ…ホルス。」

「うるさいんや！！！！このストーカーには嫌というほど……
ん？ってか、なんでストーカーがオイラの炎を消すくらいの拳を持
ってるや？」

ホルスの眼が…怒りに染まった眼から、獲物を狩るときのような目
に変わった。

「……分かったで……
お前…主人を狙ってるんやろ？」

……どうやら完全に誤解されているらしい……

「待て…俺は……」
「問答無用！！『ブラックメガフレーム』！！！！！！」

ホルスが黒炎を再度放った。

……仕方ない……倒すしか方法がなさそうだ。俺は小宇宙を高めた。

ズトオオン！！！！

「よっしゃあ！！」

「……果たしてそううまくいくな？」

「！？」

俺を灰にしたと思い込んでいたホルスはあっけにとられていた。

「廬山昇竜覇！！！！」

廬山の大滝をも逆流させる拳をホルスに向けて放った。

「グフアアア！！」

ホルスの口から鮮血がしたたり落ちたのを見た。

そして……力尽きたのか、バタリ……とホルスは、そのまま地に崩れ落ちてしまった。

それを少し離れたところから見ている青い騎士……。騎士は一度しまった剣を再び抜く。

「…我が同朋をここまでするとはな……たかが人間が後悔するがよい……！」

静かな闘気と殺気をにじませている……これは見境もなしに突っ込んできたホルスより厄介な相手になりそうだ……

「…仕方ない…来い！龍星座ドラゴンの聖衣……！」

「何を呼ぼうにも…俺の剣からは逃れられんぞ……！」

青い騎士が剣を振り下ろした刹那……！

カキーン……！！

「…久々に使うことになったな…このドラゴンの盾を……」

間一髪間にあつたようだ。

自分でもほとんど意識しない間に、濃緑色の聖衣……龍星座ドラゴンの聖衣が俺を纏い、聖衣の中でも

最高の硬度を誇る盾が、青い騎士の剣を防いでいた……が、毎度のことながら、すでに傷がついていた。

「…俺の剣を防ぐとは……な。」

青い騎士は少し汗をかいていた。

「…つく（実体化している時間が長すぎたのか…思った以上に疲労が激しい…!!）」

「…時間がない……これでケリをつける!!」

剣に全身全霊の力を込めている青い騎士……なら、こちらも戦士として、それに答えなくてはな…
俺も最大限の小宇宙を高めていった。

「いくぞ!!俺の奥義!『時空突破・開闢双破斬』!!!!」
「受けてみる!全てのモノを切り裂く聖剣…『^{エクスカリバー}聖剣』!!!!」

青い騎士の剣から放たれた斬撃と、俺の左手から放たれた斬撃とがぶつかり合った!!

ドシャアアン!!!

斬撃同士のぶつかり合いで勝ったのは俺の政権だったらしい。
青い騎士は聖剣の斬撃に耐えられず、剣が折れ…自身は大木にたたきつけられた。

「くはあ!!」

「…か…開闢!？」

口から赤い色の液体を出した騎士は、動かなくなった。

ホルスの口から弱弱しいが…仲間を心配するような声が漏れた。

…が、騎士が反応しないのを見ると、ホルスの目に再度…光が灯った。

「…まだやるのか？」

ホルスは満身創痍だったが、それでもなんとか起き上がって、俺を睨みつけてきた。

「…はあ…はあ…もう…オイラしかないんや…」

主人は…花凜の所には行かせてたまるかつちゅうんや!!」

「…だが…お前の主人を見張ることが俺の任務なのでな。

悪いがいかせてもらう。お前では俺の相手にはならん…!？」

その時だった。上空から斧が振り下ろされるのに寸前まで気が付かなかった。

ズシャアアアン！！！！

さっきまで俺がいたところの地面が変形していた。

「…本当にカードの精霊つていたんだね…」

少女の軽やかな声が俺の耳に入ってきた。

見てみると、斧…ではない！！岩でできた剣を軽々と持ち上げている、2mをも超える巨大な上半身裸の黒っぽい男と…その足元には、この場には不似合いな…まるで雪の精霊を思わすような白い髪の少女が佇んでいた。

「城に帰ろうとしたら、大きな物音がするんだもん。びっくりしちゃった…けど…」

まさか花凜ちゃんの精霊が襲われているなんてね……」

「…お前…神代花凜の知り合いか？」

「知り合いつて言ったら…まあ知り合いかな？」

それよりもさあ……ここまでM&Amp;Wの精霊に危害を加えるなんて許せないな。」

微かに怒りがその言葉の中に含まれていた。

「あの鎧の人をやっちゃって！バーサーカ！！！」

「ぐおおおん！！！」

バーサーカーと呼ばれた巨漢が俺に襲い掛かってきた！！！！

6話 勘違いから大惨事になることってよくある（後書き）

「イリヤと紫龍が対峙してた頃」

・衛宮邸

セイバー「…なにやら外が騒がしいですが…大丈夫でしょうか、シロウは…」

凛「平気よ、平気。」

どうせ酔っ払いが不良とドンパチやってるだけよ。」

アーチャー「…それにしても騒がしすぎだと思っただがな。」

桜「神代さんには先輩が付いていますけど……」

さつき帰っていったイリヤちゃんは大丈夫でしょうか？イリヤちゃんの家がある方向ですよね？」

ライダー「問題ないわ、サクラ。」

ランサー「そうそう！あの子にはバーサーカーが付いているんだぜ

？」

凜「そうね…あのバーサーカーが付いているんだから……って……」

一瞬、静まり返る室内……

ランサー「…なあ……あの物音が聞こえ始めたのって……その……
バーサーカー達が帰ってから……だよな？」

アーチャー「……だな。」

セイバー「リン！私は今からシロウの元へ行こうと思います！-」

凜「ま…待ちなさいよ、セイバー！-」

セイバー「何故止めるのです！？こうしている間にもシロウが暴れることしか能のない獣の餌食に！-」

凜「何も士郎とバーサーカーが敵対してないでしょ！

士郎がバーサーカーと組んで敵と戦わざる負えない状況になったとか……

……やっぱり私も行く!!」

アーチャー「落ち着けマスター。衛宮士郎なら無事だと……」

凜「アンタよく落ち着いていられるわね!!
いくわよ、セイバー!!!」

セイバー「出陣ですね、リン!!」

ランサー「……仕方ねえな…危なっかしいから着いていつてやるか。

」

凜「アーチャー!?!何グズグズしてるの!?!行くわよ!!」

アーチャー「…了解だ、マスター。」

桜「…私たちは御留守番…か…（先輩も…みんなも大丈夫かな?）」

ライダー「………落ち着きのない人たちですね……」

7話 時差って計算するのめんどくさい

side デスマスク -

「……たたくサガの奴……こんな夜中に呼び出しやがって……
これも、あの女神の嬢ちゃんが誘拐されたからだぜ……」

俺はあくびをしながら教皇の間に辿りついた。

玉座に腰を掛けているサガが自然と目に入る……

「^{キャンサー}蟹座の黄金聖闘士、デスマスク……ただ今参上いたしました。」

「来たか、デスマスク。」

「……ってかさ、こんな夜中に何なんだよ？」

俺はテメエの命令ですつと黄泉比良坂を監視してたんだぜ？」

冥界への入り口……『黄泉比良坂』に自由に行けることができる俺……
……と五老峰の老師と前教皇と交代で、冥界へ向かって歩く亡者の中に女神の嬢ちゃんが混じっていないか監視を続けていたのだった。

「……すまんがお前とアフロディーテに頼みたいことがあつてな……」
「アフロに？」

アフロディーテというのは俺の悪友で、魚座の黄金聖闘士の『男』

だ。

「でもよ…アイツの小宇宙を感じねえんだけど？」

「奴には先に現地入りさせたからな。」

「……実はお前とアフロディーテに『黒炎の姫君』…つまり『神代花凜』という少女の保護を頼みたい。」

「誰だソレ？」

「うむ……実はアテナを連れ去った人物が『次の標的』と定めた人物だそうだ。」

「…名前的に日本人だろ？なら青銅のガキどもに任せればいいじゃねエか？」

「……と思い紫龍に監視・警護を任せたところ……

「………奴は瀕死の重傷を負った。」

「マジかよ！！？」

おいおいおい……あの紫龍が負けたって！？

あんまりいたくねえが、奴は俺たち並…か以上の力を持つてるんだぜ！？

「先程まで気を失っていたが……目を覚ましたので話を少し聞くことが出来た。」

少女を監視していたところ、突然…青い騎士と白銀の鳥が襲い掛かって来たらしい。

で…こいつらは簡単に倒せたそうだが……その後から来た巨漢にやられたそうだ。」

「………どんな奴だ？」

「……2 mを余裕で越える男で、一度…拳で頭をとばしたが、再生したそうだ。」

「……なるほどな…だから俺か……」

なんでサガが俺を呼んだか分かった気がした。

物理攻撃が効かない相手なら…魂に攻撃をすればいい。

黄金聖闘士の中で魂に攻撃できるのは…俺と……乙女座のシャカと双子座のカノンくらいだ。

カノンの奴は海界の管理で忙しいし、シャカは言うことを聞かいかイマイチ分らないので、俺が出動ってことになったんだろう。

「…で、なんであとアフロも？」

「うむ……紫龍が言うには意識を失う直前に、巨漢…を従えていた少女に駆け寄ってくる一団を見たそうだ。

そのことはムウの下僕も証言している」

「……待て待て……なんで貴鬼がでてくるんだ？」

ムウの下僕…というか弟子である貴鬼ききがそこでなぜ出てくる？

あのオマケのガキは麻呂眉一族の生息地であるジャミールにこもってるんじゃない……

「実はな、紫龍の聖衣は修理中でジャミールに保管されてあったのだ。

それが突然飛んでどこかへ消えたので、あわててムウの下僕が紫龍の所にレポートしたところ…

瀕死の紫龍と、せつかく修理したのに『死んだ聖衣』とそれを囲む奴らを見つけたのだそうだ。」

「…んで特徴は？」

「まず紫龍を襲った巨漢と巨漢を従える少女の他に……
白髪の男を従える黒髪の少女と、金髪の少女と赤い槍を持った青髪の男…の6名だそうだ。」

戦っても勝ち目がないと判断した下僕は、紫龍を連れて聖域へサンクチュアリと逃げてきたのだ。

…賢明な判断だな。」

…厄介なことになって来たな……
つまりあれか……俺だけだと不安だからアフロディーテもってことか……

「本当は物理攻撃系の奴も派遣しようかとも思ったのだが……
生憎とそういう攻撃を得意とする奴らは感情のコントロールが出来ないからな。」

『保護』よりも『紫龍の敵打ち』を優先したら不味い……」

「…確かにな……」

シユラの奴も紫龍関係のことになるとアツくなるし、老師も弟子がやられたとなったらアツくなるだろうからな……

獅子も蠍も脳みそ筋肉だし……ん？ならアルデバランはどうなんだ？
」

誰もが認める常識人の牡牛座のアルデバランの顔が浮かんできた。

「いや。アレは幻術に耐性がない。

敵に幻術使いがいた瞬間に、アレは終わりだ。」

「まあな……」

はあ…メンドクセえ……んで、どこなんだよ、そこは？」

まあ…アフロディーテとなら大抵の敵への対策は出来るしな……

それに行先は…おそらく日本だ。

日本つと言ったら…娯楽あり食材あり……言っちゃ悪いが聖域よりずっと暮らしも快適だ。

たった一人の小娘を保護するだけで、快適な生活が維持できるなら文句言わずに向かったほうがいい。

「……冬木市というところだ。」

「side 花凜」

「ふあゝ……よく寝た……」

眼をこすりながら時計を見ると……もう9時……

えっ……学校はって？

実は今日は土曜日なんだよな……転入してすぐ休みってなんだよ？
まあ……別にいいけどさ……

『ようやく起きたか……主人。』

着替えが終わるころ……

ベットの側でこちらを見ている漆黒の龍……『ダーク・アームドド
ラゴン』がいた。

「……珍しいな……お前が姿を現すなんて……」

『ホルスから頼まれてな。』

『オイラは遠くから守護するから近場は頼む』ってな。』

……ホルスに何かあったんだな……つまり。

そっぴや、昨日……土郎に送ってもらってるとき、やけに爆発音がし
てたけど……もしかしてホルスと誰かの戦闘だったのかもな……
んで……傷ついて精霊化が出来ないって話か……

………ったく……心配かけたくないからって嘘つくなんての。

アタシは食パンを加えながらジャケットを羽織った。

『……どこに行くつもりだ？』

「……ん？ああ……頑張っているホルスやアンタ達のために新鮮な魚を
仕入れに港へ行くのさ。」

『港？……今から釣りか？』

釣りというのは…もう少し早い時間ではないと……』

「大丈夫だって。」

アタシはニーーっと笑った。

「たぶん、誰か分けてくれそうな人がいると思うから。」

そう言うと、玄関の戸を開いた。

7話 時差って計算するのめんどくさい（後書き）

花凜が起きた頃の衛宮邸では……

士郎「あれ？神代の奴…朝食食べに来ないのか？」

桜「そういえば…来てませんね。」

凜「まだ寝てるみたいだよ。」

士郎「なんでそんなこと分かったんだ？」

凜「キャスターに電話して、水晶を通して神代の様子を見てもらったのよ。
もうグッスリだったみたい。」

セイバー「あのキャスターが…よく話が通りましたね。」

凜「こんな時もあるとかと、昨日…学校で葛木先生を何枚か盗撮してもらったのよ…アーチャーに。」

士郎「なんでさ!？」

凜「『アーチャーの目はタカ目』っていうみたいに目がいいから、かなり遠くからでも的確に写真が撮れるのよ。」

それに、『投影』でつくりだした…N・Kとかが使いそうな最高級カメラで撮ってもらったから、ピンボケもなし!」

ライダー「…ですが…自分で撮った方が手間がかからないのでは?」

凜「……………」

アーチャー「マスターは機械オンチだからな。カメラが使いこなせないのだ。」

凜「あ…アーチャ…!!…!!何言ってるのよ!!…!!」

ズシンズシン!…!

アーチャー「いててて…!!」

照れ隠しに俺を蹴るのは止めてくれ!…!」

藤ねえ「あはは！！！

なんだかわからないけど、愉快ねえ〜」

士郎「なんでさ！？」

衛宮邸の朝はにぎやかである……

8話 サバに限らず魚って新鮮なうちが美味しい

' s i d e 花凜 -

空は快晴

海風は頬に心地よく、ウミネコの鳴く声が寂しさを関わらせている……

文句のつけようもないロケーション……

午後の散歩を好む爺さんたちやマラソンを好むスポーツマンの清涼剤になりそうな冬木市の港…

しかし……

1人の暴力団関係者っぽい男によって、人の寄り付かない、魔境と化していたのだった……

でも、不思議と違和感がないのは何故だろうか……

まあ別にかまわない…アタシは自分の目的を果たすまでだ。

「ランサーさんだっけ？釣れてますか？」

声をかけると、4月末なのにアロハを着た男…サーヴァントランサーがちらり…
つとこちらを見て少し笑った。

「たしか…花凛嬢ちゃんだったけ？
まあ…ぼちぼちつてとこだなー？」

サバ山、クロダイ4にカワハギ3つてとこだ。」

「へえ……そんなに釣れるもんなんですか？」

ランサーは大きな欠伸をした後に、少し誇らしげに笑った。

「海なんだから種類多いのも当たり前なんじゃねエ？
…それにしても色々と混ざりすぎか……でも、まあ別に珍しいしいんじゃねエか？」

いい加減な男だ……とりあえず前もって買っておいた缶コーヒーを
パスしてバケツを覗き込む。

確かにバリエーシオン豊かな魚が、狭いバケツの中をつこめいていた。

「…サバ多すぎですね。」

「何だかしらねえけどな。」

っていうか、この時期ってサバの時期だったけ？

それよりも……

「ここですつと釣しているんですよね？」

なんで『竿がけ』がないんだ……あつ……すみません……ないんですか？」

『竿がけ』というのは釣竿をひっかけるアイテムで、長時間釣りをしているときに必須だ。

釣竿って見かけによらず結構重い……それにわずかな揺れで獲物が逃げてしまうのだ。

そのために『竿がけ』……すなわち固定具は必須だと思うのだが……

「べつに敬語使わなくていいって。

『竿がけ』か？……あつたら便利なんだろうけど、俺にいらねえな。竿と糸とで様子を見るのが好きなんだよ。」

いやいや……好きだからって……

それが出来るアンタの両腕が凄いよ……力だけじゃなくて機械の……とき精密さと持続時間……

やはり一流の槍兵だからか？

「……それより、嬢ちゃんはどうしてここに？」

「あ……新鮮な魚を仕入れたくて。

土曜日だし、だれか大量に連れている人がいたら譲ってもらおうと思つて……」

だが…この港にいるのはランサーだけだった。

「だからクーラーボックスを背負ってんのな……
分かったよ、サバ1・2匹ならただで持って行っていいぜ。コーヒ
ーの礼だ」

「あ…ありがとう!!ランサーさん!!!!」

「へえ…君、魚欲しいの?」

いままで気配のなかったところから人の声がした。
ってか…このボイスは!!!!?…っと思ひ振り返ると……

(な…なんでアフロディーテがいんの!!!!?)

だれもが女と間違える黄金聖闘士 (…とはいっても今は聖衣着用
ではなく私服だが…)…魚座のアフロディーテがほほ笑んでいたの
だった!!!!

side ランサー

振り返るとそこにいたのは、この港に不似合いな美女だった。
ってかここまでの美女はそうそう目にかかるもんじゃねエぜ!!
?スカートはいてりゃもつといいのによオ……

「えっと……お兄さんは何をしに?」

おい……花凛嬢ちゃんよオ……これのどこが男なんだよ?
すると、美女は驚いたように眉を持ち上げた……ほらな、怒られ……

「どうして私が『男』だと分かったんだね?」

……はい?否定しねエのか?

「なんとなく……です。」

「……ってかマジで男かよ……こんな美人なのに……」

俺の言葉にカチンときたのかもしれない。

美女……オツと間違えた、美男子は顔をしかめた。

「えっと……どうしてこちらに?」

「ココの辺りで知り合いと待ち合わせしていてね。」

「……その……知り合いってどんな人ですか?」

「そうだね……そのお兄さんみたいな青い髪で、人相の悪い蟹みたいな男だよ。」

どんな奴だよ！？蟹みたいって……想像つかねえ……

「（蟹って言うたら……デスマスク！？なんでここに……）

へえ……蟹みたいな人って面白い表現ですね！！

でも……なんでこんな港で待ち合わせなんですか？あ……聞いちゃいけないらしいですけど……」

「実は仕事でね。これ以上は言えないんだよ。」

話せない仕事……か……最初は映画の撮影か何かかと思ったが……殺し屋か？なんとなく強そうなおーラだしてるしな……

「……そうですか……。」

「それよりも君……腕の力が強いみたいだね。」

『竿がけ』も使わないで釣りをしているなんて……」

この美男子も花凛嬢ちゃんと同じことを言ってきた。
まあ……槍使いだからな。

「まあな。」

こいつなら俺の仲間内で負ける気はしねえよ。」

「へえ……あつ……でも、アーチャーさんも釣りが得意そうな雰囲気

あるんだけど。」

「花凛嬢ちゃん…あのコピー馬鹿と一緒にしないでくれ。」

あんな釣りという男の世界を知らねえような奴には負けねえって。」

「口は災いの元だよ。」

花凛が心配そうに口にする。

へっ！そうだとしても俺は釣で負ける男じゃねえっての！！

俺は大口を開けて笑ってやった。

「平気平気。バレねえって。」

「おい、待ったか、アフロ〜〜！！」

向こうから走ってくる不良風の男がいた。

………どこが蟹なのだかは分からないが、青い髪の人物なんてそうそういないから、おそらくアレがこの美男子が待っているという人物だろう。

「アフロ？」

あ…花凛嬢ちゃんもそこ気になってたか………どっからどう見てもあの美男子はアフロじゃない。

髪はフツーに長いし…サラサラヘアーだしな。

「ああ…私の愛称さ。」

あまり好きではないが私の名前は『アフロディーテ』なのでね。」

「なるほどな…『美の女神』か……」

アフロディーテは苦笑すると懷から2輪のバラを取り出した。
手品か！？と突っ込みたくなるくらい鮮やかな出し方だった。

「御嬢さんとお兄さんにコレを上げよう。
連れを待つ退屈しのぎに付き合ってくれた礼だ。」

それは深紅に染まった美しいバラだった。
…正直、男から花なんてもらったところで嬉しくもなんともない。
が、せつかくくれるというので貰ったほうがいいのか？

「すみません…その……いりません。」

ためらいがちに…それでもきっぱりと断る花凛嬢ちゃん。
女っ気ねえな…バラが嫌いなのか？
アフロディーテは少し顔をゆがめた。

「嫌いか？」

「い…いえ…バラは高貴で凜として好きですけど……
その……なんというか……毒とかありませんよね!？」
「待て待て待て、なんで毒なんだよ!？」

思わず突っ込んでしまった。いや…普通は毒なんてないだろ。たかがバラだぞ？

「なんか…直感！女の勘って奴？」

「信憑性ねえな……ってか失礼だぞ。」

初対面の相手に毒バラを渡す奴なんて………」

ここで俺は口を止めた。

そつえば…この嬢ちゃん自身はしらねえが、命を狙われてんだよな……

昨夜、この嬢ちゃんの使い魔であり守護者……まあなんかのカードの精霊とか言っていたが……それが鎧の少年によってボロボロにされてたのを思い出す。

鎧の少年の方はバーサーカーにやられて、仲間の少年の救援でどこかに行ってしまったが……危険が去ったというわけではない。

もし…こいつらが嬢ちゃんの命狙ってる奴らだったら……

「かったるいな、アフロ。」

アフロディーテが待っていた男がめんどくさそうに口を開いた。

「そっちの兄ちゃん気が付いてるみたいじゃねエか。」

「!?!」

「ひゃあ!?!」

俺は釣道具を放り投げると、嬢ちゃんを抱えて2人と距離を取った。

「い…いきなり何すんだよ、ランサー!?!」

「わりいな嬢ちゃん。」

あいつらさ…嬢ちゃんを狙ってるみたいだ。」

「は…はあ!?!?つか…まさかこいつ等がストーカー!?!?」

いや…ストーカーって嬢ちゃんが言ってるのは昨日の少年だろうが…黙っておくことにするか。

「ひでえな、ストーカーって…俺たちはお前さんを保護しに来たんだぜ?」

保護しに来たやつが、こいつの守護者を倒すのか?

つと言ってやりたかったが、昨日の『ホルス』とかいう守護者が『主人には教えないでくれ』って言っていたのを思い出し、何も言わないことにする。

「な…なんで…?」

「状況確認は後だ。嬢ちゃんはさっさと家に帰りな。」

ここは…俺が食い止める!?!」

俺は瞬時に武装に切り替え、『サーヴァントのランサー』の姿に戻り、深紅の色をした刺し穿つ死棘の槍…『ゲイボルグ』を構えた。

「ら…ランサー？」

「説明している暇はねえ！！行け！！！！」

「隠密に済ませたかったが…仕方ない…舞え『ピラニアローズ』
！！」

アフロディーテが黒バラを繰り出してきた。

そのバラはまるで意志があるかのように舞い…俺たちの退路を塞いだ。

やべえ……絶望的ってやつはこういうことを言うのかもな…

そう思った時だった。

ズドオオン！！！！

突然、どこからともなく放たれた攻撃が黒バラを霧散させた。

爆炎が収まりうさんさせた主が姿を目にした時、俺はため息をつき

たくなった。

「…虫の知らせがしてな。どこぞの駄犬より釣りの腕が良いということ^を証明しに来たら……」

ずいぶんと賑やかな祭り会場になっているではないか…ランサーよ。

「

そこに立っていたのは、高級釣道具を背負っ^てはいるが、弓を構えている白髪に褐色の肌をした男……アーチャーだった。^{サーヴァント}

9話 心臓を買かれても一応生きていたアテナって凄い

‘side 花凜・

……やばいやばいやばい……！

ってかさ、なんでアタシ命狙われてんの！？

しかも、黄金聖闘士に……

とりあえず、あの場合はアーチャーが助けてくれて……ランサーとアーチャーが黄金聖闘士の相手をしてくれている間に逃げてきたんだけど……

……気になるから港までこっそり戻ってきてしまっていた……

『主人……逃げないのか』

『……せつかくあの2人が逃がしてくれたのに……なぜ？』

そう言って姿を現した精霊は、『混沌の黒魔術師』と『ダーク・アイムドドラゴン』……。

「……だって……相手は人間規定外の強さをもった黄金聖闘士だよ！？
たしかにサーヴァントも十分規定外の強さの持ち主だと思うけどさ
……」

そう言つて、こつそり木箱の陰から、先程までいたところをチラリ……と覗き見ると……

「『ロイヤルデモンローズ』!!!」

「っは!そんなバラなんかに負けるかよ!!」

アフロディーテの赤薔薇を、回転させた赤い槍で粉碎していくランサーの姿があつた。

……が……アーチャーの姿が見えない……。

同じくデスマスクの姿も見えないから……たぶん、デスマスクの技『積戸気冥界波』で冥界の入り口……『黄泉比良坂』に飛んでいったのだろう。

『……どうしたのだ、主? 深刻な顔をして……』

「……いや……アーチャーもデスマスクも好きなキャラだから死なせたくないな……って

同じことがアフロとランサーにも言えるんだけどさ……」

Fateのキャラも魅力的で好きなキャラが多いけど、黄金聖闘士だつて負けないくらい魅力的で好きなキャラが多い。

いや……デスマスクとアフロディーテは人気の少ないキャラでYah・o!の人気投票でも、あまり高くなかつたけど……でも、『力こそ正義』つていう信念や独特な戦闘スタイル……それに外伝であるLCの彼らの前世である蟹座と魚座を見て……それから一気に好きになったキャラ達だ。

……全員……ここで死なせたくない……

そう思っていると、混沌の黒魔術師がため息をついた。

『仕方ない……主のために一肌脱ぐとしよう……』

'side アフロディーテ

「……つぐ……なんだこれ……身体が……」

ようやく目の前の青髪青タイトの槍使いに魔宮薔薇デモンローズの毒が効いてきたみたいだ。

通常の人間ならもう少し早く効いてきているはずだったが……
姿からして『普通で無い』ように、彼自身も『普通ではない』らしい。

とはいえ……聖闘士のモノとは違う『普通ではない』感じた。

「身体が自由に動かせないのだろう？」

君は私の『ロイヤルデモンローズ』を全て粉碎していたが……いく
ら花卉を壊しても香りは多少は残るのだよ。」

「…つちくしょ…さっきの甘ったるい…臭いは…」

目の前の男は悔しそうな顔をしている。

さてと……このまま殺すか…それとも生け捕りにするか……

たぶん…相方のデスマスクの方は、さっき彼と対戦していた白髪の男と遊んだ後に、男を躊躇なく冥界の穴へと突き落としているだろう。

だったら…殺すより生け捕りにして、情報を集めた方がいい。幸いにも毒は効いているみたいだし…

「…こんな…ところで…負けるかよー!」

男が槍の持ち方を変えたようだ。……一体…あの動きにくい身体で何をしようというのだろうか？

「『ゲイ…ボルグ』!?!」

「!?!?!?」

赤い槍が私目がけて襲い掛かってきた…!!

「side ランサー」

「はあ……はあ……」

先程までアフロディーテがいた場所に土埃が立ち込めている……

考えてみると、あの男勝りの嬢ちゃんを助ける義理は俺にない……でも……なんとなく『助けてやりたい』と思わせる雰囲気っていうのがあるんだよね……

あのセイバーにも勝てるくらいなんだから、全然心配しなくて良さそうなのに……

……少しでも逃げる時間を稼いでやろうって思っちゃった。

だから俺の宝具『刺し穿つ死棘：ゲイボルグ』を使った。これなら俺の身体の内自由とお構いなく……俺の魔力だけで相手の心臓を突き刺すことができる。

「ほう……面白い槍だね……」

「！？」

ば……馬鹿な……なんで俺の槍を受けたのに……あの煙の向こうから声がするんだ！？

その時…煙の向こうから黄金の光がチラリ…と見えた気がした。

……まさか……

あのセイバーが海に落とした…黄金の鎧を着た英雄王・ギルガメツ
シュの呪いか！？

「はあ…はあ…『ゲイボルグ』って確か…サガが昔教えてくれ
た…けど…

アイルランドの『光の御子』が使う…槍…で…心臓を貫く…槍…だ
った…はずだ…」

荒い息をしながら姿を現したのは…黄金の鎧を身にまとったアフ
ロディーテだった。

一応、『ゲイボルグ』は彼に当たっていたが、すんでのところで避
けたのか、心臓から少しずれた…型の辺りが貫かれた痕跡があった。

「っへ…これでも…まだ立ってられんのか…？」

化け物かよ…人間だろ？こいつ…人間を越えた力を持つてるぜ？
そんな俺の驚きとは関係なしに、アフロディーテは俺の技から得た
情報を考えているようだ。

「…君こそ…毒が効いているのに…まだ動けるとは…
『ゲイボルグ』を使えるということは…『ケルト神話』に登場す

る…光の御子…

『クー・フリーン』……まさか……お前たちは『ケルト』の者が！？
『ケルト』の者が『アテナ』様を攫ったのか！？」

……いや……確かに俺は『ケルト神話』に出てくる英雄だけだよ

……
他の奴らはケルトじゃねえし、そもそもアテナってギリシャ神話の『戦勝の女神』だろ？

なんでそんな奴を『ケルト』が攫わねえといけねえんだ？

「……だんまりか……
まあ構わない。…情報を得たところだ……そろそろ…お仕舞にしよう。」

そうやって奴は一輪の白薔薇を取り出した。

「ブラッディ・ローズ……！！」
「……っ！」

一瞬だった。

一瞬で奴の手から放たれた白薔薇が俺の心臓を貫いたのだ。

「……この技は……私流の……ゲイボルグ……といったところだ。
残念だった……みたいだな……」

……ちくしょ……まさかこんなところで……

意識が……どどん闇に沈んでいく……

わりい……せつかく受肉したのに……俺はもう退場みたいだ。

さっさと座へと帰るとするか……さすがに嬢ちゃんもかなり遠くへ

……

「ランサー……!」

……嬢ちゃんの声が聞こえた気がするが……気のせいだろうか？

声の方を向こうとしたとき……なにやら暖かい感じの空気が俺に触れた。

「ば……ばかな……その小宇宙は!」

なんか遠くでアフロディーテの奴が驚いている声が聞こえる……

それと共に、身体が楽になっていく……

ああ……俺は死ぬんだな……

俺の意識はここで……

「ほら、馬鹿犬！！！起きろって！！！」
「誰が馬鹿犬だ！！！！」

ガバリッと起きて、声の主を殴る俺。
声の主は痛さを堪えた涙目で俺を見た。

「よかった…それだけの元気があれば、ランサーはもう平気だな！」
「！」

につこりと笑う嬢ちゃんがいた。

……あれ？なんでこんなに意識がはっきりしてんだ？

9話 心臓を買かれても一応生きていたアテナって凄い（後書き）

星矢「なあ、なんでランサーは『馬鹿犬』って呼ばれてたんだ？」

士郎「知らないのか？」

『ケルト神話』でランサー…クー・フリーンは『猛犬』って意味なんだ。」

瞬「…一応、修行時代に他の神話についても学んだと思うけど……」

星矢「俺はそんな覚えねえな。」

魔鈴さんの生きるか死ぬかの修行の日々だったから……」

桜「な…なんか遠い目になってますよ？」

氷河「ふ…修行時代か…懐かしいな…
わが師の教えは最高だったな……」

凜「……こっちはこっちで意識がトリップしてるわよ。」

瞬「…気にしないでください……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6434y/>

Fate/Gold Saint 黒炎の姫君

2011年11月29日16時56分発行